

第5章 総合考察及び今後の課題

本研究では、点字を常用している児童生徒が効率よく漢字の力を身に付けるための指導法の研究を行い、そこから指導プログラム及び教材の開発を目指した。第2章第1節で本漢字学習プログラム及び教材開発にあたっての考え方を述べたが、これらを基に漢字をグルーピングし、第1段階から第10段階までのプログラムと教材が出来上がった。このプログラムで取り上げた漢字の字種については、「学校教育段階で要求されている基礎的・基本的な漢字力」とはどのようなものなのかを考えながら選定した。結果的には、新聞に出現する漢字全体の97%をカバーするであろう漢字（国立国語研究所の調査である新聞の使用漢字頻度順位から）と一般の漢字使用の目安となっている常用漢字とからなった。選定の過程では、常用漢字ではあるが、使用頻度順位が低く、日常的にも馴染みのない漢字が入っており、ここで取り上げるかどうか思案した漢字もある。しかし、現行の学習指導要領では、常用漢字は義務教育段階で学習することになっているので、常用漢字全てを取り入れることとした。現在、国語審議会では、常用漢字一覧表の見直しについて検討しており、今後、時代にあった本来の常用漢字が選定されることになろう。これらの結果を見ながら、本プログラムも修正していく必要がでてくるであろう。いずれにせよ、本プログラムは段階別に構成されているので、全ての漢字を学習するというところにこだわらず、学習者の発達段階を踏まえながら、柔軟かつ応用的に活用することができると思う。

第3章においては、盲学校小学部での漢字指導状況について、アンケート調査をもとにその実態を明らかにした。盲学校点字教科書においてはその性格上、指導者が補助教材等を活用しながら、その内容を補うような配慮と工夫が必要である。しかし、アンケート結果から見えてきたものは、漢字指導の必要性は感じながらも、漢字を扱った単元を指導していなかったり、漢字には触れずに本文に沿った指導に終わっているところがあり、指導時間や教材作成時間の確保や、指導法等に課題を抱えていた。これらの実態を考えると、まず、国語の授業の中で、点字使用児童の漢字指導をしっかりと位置付ける必要があるだろう。漢字を扱った単元を指導していなかったり、漢字には触れずに指導を進めていたのでは、漢字力、語彙力等、国語科が本来目的としている力の育成はできない。このような漢字を扱った単元では、どのような補助教材や補足説明が必要なのか。現在、その指導は各指導者にゆだねられている感が強い。このように考えると、点字使用児童を指導するための補助教材や教材のアイデア、配慮事項が記載された指導書や、点字教科書とは別に漢字学習に特化した冊子等が必要ではなかろうか。

このような国語科の指導実態の中で、本プログラムと教材が有効なものになるのかどうか、国語の授業の中で活用した事例を第4章で紹介した。この事例は小学部5年から6年の国語の指導を追ったものの一部である。本プログラムと教材の他、必要に応じて補助教材を作成して指導に当たった。各種の評価テストの結果をみると、指導開始時から比べて漢字力、語彙力等の伸びが見られる。また、他の教科や日常のコミュニケーションへの広がりが見られている。事例の中で具体的に記載しているが、このプログラムの考え方で指導したことによって、未習得の漢字であっても、音や意味を推測する力がついている。このことは、日常的に漢字に触れることの少ない点字使用児童にとって、特に有効なことである。

本プログラムは、漢字の成り立ちから基本漢字を覚え、部首による漢字の構成要素間の配置関係の理解、そしてそこから単語家族の考え方を導入して多くの漢字を関係づけて学ぶという指導法であり、各段階ごとに漢字をグルーピングしている。教材はグルーピングした漢字を点線文字で表し、

音、訓を点字で示した。基本漢字の部分は具体物のイメージから中間体を通して漢字が成り立っていることを点図、点線文字で表し、簡単な図の説明を点字で入れた。今後、これらの漢字に合わせた説明文を作成していくことが必要である。漢字教材を触察しながら、説明文を聞く（あるいは読む）ことができれば、自学することもさらに進められる。説明文を作成していく際には、いくつか留意する点がある。それは、まず、楽しみながら漢字を学習することができる工夫である。日常的に漢字に接している晴眼児であっても、漢字学習を苦手とする者は多い。日常的に漢字に馴染みの薄い点字使用児童に対しては、苦手意識を持たせないようにすることが大切である。また、漢字はそれ自体が語であるゆえに、漢字の学習は国語の語彙力をつけることにもつながる。それを踏まえた言葉の使い方、取り上げる熟語の選択をしていかなければならない。

本報告書では、平成16年から18年までの3年間の成果を報告した。今後、このプログラムと教材を各所で使用し、さらなる修正をしていきたい。また、上記にあげた課題解決に取り組んでいきたい。